

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：32406

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12407

研究課題名（和文）タイ地方都市における創造都市化とローカル・コミュニティ再編に関する民族誌的研究

研究課題名（英文）Ethnographic research on creative cities and transformation of local communities in Thailand

研究代表者

須永 和博（Sunaga, Kazuhiro）

獨協大学・外国語学部・教授

研究者番号：70550002

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：タイ国では近年、アートやデザインを媒介としたローカリティの刷新、いわゆる「創造的転回」とも呼ぶる状況が生まれている。本研究では、タイ南部のソンクラ旧市街およびブーケット旧市街を主たる事例として、「創造的なまちづくり」のあり様について考察した。本研究で特に着目したのは、「創造的なまちづくり」における「都市コモンズ」創出という側面である。すなわち創造性が、クリエイティブ産業の促進という資本主義的原理よりも、地域住民が集い、土地の記憶や歴史を継承/発信するためのコモンズ創出のツールとして活用されている点を、具体的なまちづくりの現場から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

創造都市や創造産業といった視点から都市の再編のあり様について論じた研究はすでに一定の研究蓄積があるものの、その多くは都市計画や文化政策など政策論の観点から論じられたもので、都市内部の諸アクター間の協働や交渉、抵抗などを含むダイナミズムに焦点を当てた研究は限られている。そこで本研究では、民族誌的手法を用いて、創造都市化に伴うローカル・アイデンティティの諸相について、諸アクター間の相互作用をミクロな視点から明らかにするとともに、資本主義的な原理とは異なる都市コモンズ創出という観点から、アートやデザインなどの創造的活動のポテンシャルについて明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In recent years, Thai tourism has been experiencing a "creative turn", which has provided local communities with opportunities to revive their local traditions and identities through creative industries, such as art, design, craft and gastronomy.

In this research project, we have examined the potentials of creative community design and development in the Old Towns of Songkhla and Phuket in southern Thailand as major case studies. This study focused on the aspect of creating "urban commons" through creative community development. In other words, we argued that creativity is utilized in those communities as a tool to create social places for local residents to gather and inherit local memories and history, rather than a new form of cultural capitalism to promote creative industries.

研究分野：観光人類学

キーワード：創造都市 コミュニティデザイン 旧市街 都市コモンズ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年東南アジアでは、国内観光市場の成長を背景に、空洞化が進んでいた地方都市・旧市街の歴史的景観がノスタルジー消費の対象として再発見されるといった現象がみられる。こうした動きは、観光者や NGO、資本家など様々なモビリティを生み出すと同時に、地域住民によるローカル・アイデンティティ刷新の契機ともなっている。たとえば一部の地域では、アートやデザイン、建築など「創造階級」に属する若年都市中間層の移住や観光産業への参入によって「創造都市」としての様相を示すなか、こうした移住者の存在が媒介となってローカル・アイデンティティが刷新・再構築されていくといった状況も生まれている。

### 2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では、東南アジアのなかでも特に国内観光が発展しているタイ国の地方都市・旧市街を事例に、(1) 創造産業の集積やそこから発信されるローカル・アイデンティティの諸相や、(2) 混住化が進む社会空間で生じる様々なアクター間の協働やコンフリクトなどの社会的・文化的交渉に着目しながら、これらの相互反映過程を通じて再編されるローカル・コミュニティの動態を明らかにすることを目的としている。

### 3. 研究の方法

本研究では、タイ南部の (1) ソンクラー旧市街(ソンクラー県)、(2) プーケット旧市街(プーケット県)を中心に重点的にフィールドワークを実施し、「創造的なまちづくり」のあり様について民族誌的な手法を用いて明らかにした。

### 4. 研究成果

#### 4-1. ソンクラー旧市街の事例

##### (1) タイ観光の創造的転回

タイでは第二次世界大戦後、インバウンドを主軸とした観光政策が進められてきた。しかし 2000 年代に入ると、国内観光という新たな動きがそこに加わる。アジア通貨危機(1997 年)をきっかけに、「タイ的なもの」の復権を目指す文化運動が広まり、その結果再発見された各地の歴史やローカルリティが、観光・文化産業に取り込まれていくようになったのである(cf. Cohen, 2014)。

さらに 2010 年代に入ると、アートやデザインを媒介にローカルリティの刷新、すなわち「創造的転回」とも呼びうる状況が生まれている(Rugkhanan, 2023)。これを後押ししているのが、2018 年に設立されたクリエイティブ・エコノミー・エージェンシー (CEA) である。首相府直属の知識管理開発局内の一機関として設立された CEA は、クリエイティブ産業発展を目指した様々な活動を行なっている。その一つが、創造的地区(creative district)に指定した地域でのまちづくりの推進である。

以下では、その一例としてタイ南部ソンクラー旧市街を取り上げ、CEA と地域コミュニティが協働で行う「創造的なまちづくり」のありようについて報告する。

##### (2) ソンクラー旧市街の概要

タイ最大の湖ソンクラー湖とタイ湾に囲まれたソンクラーは、その地理的特性を活かして 17 世紀にはタイ南部最大の港市として発展した。当初はマレー系ムスリムのスルタンによって統治されていたが、アユタヤ王朝の侵攻(1680 年)をきっかけに没落すると、福建系華人が実権を握るようになる。1775 年、漳州(福建)出身の呉陽が知事(ナ・ソンクラー)に任命され、以後 1905 年まで 8 代にわたって呉一族が知事を務めた。

福建系華人のナ・ソンクラー家の統治のもと発展してきたソンクラー旧市街は、華人商人を通じて海峡植民地(ペナン、シンガポール)から先端のテクノロジーや商品が流入するなど、第二次世界大戦まではコスモポリタンな港市として賑わっていた。しかし、1970 年代に入り、近代交通(列車、飛行機)の発展に伴い、タイ南部経済の中心が内陸の町ハートヤイに移ると、次第に空洞化していった。

こうした状況に対して、2009 年、地域コミュニティや研究機関、行政が連携して、まちづくり団体 Songkhla Heritage Trust(SHT)を立ち上げる。以後、SHT がソンクラー旧市街の文化遺産の保全やまちづくりの活動を主導してきたが、2020 年以降は、CEA との協働によるまちづくりプロジェクトも行われている。本研究では、こうした近年のまちづくりの現状について民族誌的アプローチによって明らかにした。

##### (3) まちづくりの事例 The Wall at Songkhla

本報告では、ソンクラー旧市街で行われているまちづくりの一例として The Wall at Songkhla を取り上げる。The Wall at Songkhla とは、CEA と国内の照明デザイナー集団(Lighting Designers Thailand)が協働で実施した照明インスタレーションのプロジェクトである(開催期

間：2022年8月26日～9月4日)。その会場の一つとなったのが、ムスリム系住民が集住する地区(バーンボン)にあるモスク(1850年建立)である。

ソクラー旧市街の住民構成は、大きくタイ系・華人系・マレー系ムスリムの3つに大別できる。そのなかでも、従来観光の文脈で注目されてきたのは、華人系住民の店舗が立ち並ぶエリアであった。他方で、旧市街の南端に位置するムスリム系住民集住地区の歴史や文化が積極的に発信される機会はあまりなかった。同プロジェクトをモスクで開催した背景には、この地区の歴史や文化を可視化し、ウォークアビリティを高めていきたいという地域住民の思惑があった。

#### (4) 自律的な都市 commons の生成

そして注目すべきは、同プロジェクトがきっかけとなり、さまざまな地域住民主体のまちづくりプロジェクトが行われるようになったという点である。たとえば毎週日曜日の夜、「タラート・バーンボン」と呼ばれるナイトマーケットを、2022年10月より住民主導で開催している。近隣のムスリム住民がハラール料理の屋台を出すとともに、モスクを解放してこの地区の歴史や文化を紹介するというイベントである。この取り組みは、観光客だけでなく、住民にとっても非日常的な祝祭空間をつくり出すという意図がある。ナイトマーケットの他にも、空き地にコミュニティ・ガーデンを作り、その周囲に地元の美大生らと協働でウォール・アートを制作するという活動も地域住民が企画する形で行なわれている。

CEA はクリエイティブ産業の推進という国策を担う中心的組織であるが、ソクラー旧市街の事例からは明らかになったのは、資本主義的なロジックよりも、地域住民が集い土地の記憶や文化を発信するための「都市 commons」(cf. 山本, 2022) 創出という側面が際立っているという点である。

### 4-2. プークェット旧市街の事例

#### (1) ツーリズム・ジェントリフィケーション

近年、旧海峽植民地をはじめとするマレー半島の都市部では、「ババ・ニョニャ」や「プラナカン」など植民地時代に形成された混雑文化や都市景観が再発見され、ノスタルジー消費の対象となっている。こうしてノスタルジー消費の対象として再発見された海峽植民地由来の諸文化は、アートやファッション、建築、料理といった様々な創造産業に取り込まれ、それらが集積する都市空間では、K. ゴーサムという「ツーリズム・ジェントリフィケーション」(Gotham, 2005) と呼びうるような状況が生じている。

こうした動向は、タイ国プークェットにおいてもみられる。プークェットは、タイ王室の庇護のもとペナン出身のババ・プラナカンによって都市開発が進められるなど、海峽植民地とよく似た歴史的経緯をたどってきた。それゆえプークェットもまた、海峽植民地由来の諸文化が継承されてきた地域の1つであり、近年では他の旧海峽植民地同様、ツーリズム・ジェントリフィケーションが進行している。

#### (2) セルフ・ジェントリフィケーション

以上を踏まえ本研究では、プークェット旧市街におけるツーリズム・ジェントリフィケーションの諸相について明らかにした。

従来、創造産業の集積に伴う都市再編は、貧困層をはじめとする地域住民の排除などの問題を引き起こしてきた。しかし、ツーリズム・ジェントリフィケーションをめぐる民族誌的研究の中には、こうした「創造的破壊」のみならず、地域住民が観光化に伴う都市再編に主体的に回答していく「セルフ・ジェントリフィケーション」(Hertzfeld, 2017) に着目した議論も散見される。本研究では、こうした議論に依拠しながら、観光に関わる資本や人の流入に対し、プークェット旧市街の地域住民がいかに回答し自らの生活世界を再編しているのか、観光化に伴う都市再編のありようを明らかにした。その際特に着目したのは、創造的手法を通じて、プークェット旧市街の社会的記憶を継承していく力を生みだしていく地域住民の存在である。すなわち、ローカリティとクリエイティビティをバランス良く並置することで、「場所の力」(ハイデン 2002=1995) を紡いでいく地域住民のエージェンシーがみられるのである。

#### (3) 場所の力の記号化から都市 commons の生成へ

しかし観光産業には、往々にして「場所の力」を記号化してしまうリスクがある。プークェット旧市街もまた、記号化のリスクと無縁ではない。古いババ・プラナカン建築をリノベーションした店舗の中には、古い家具や生活道具を配置しただけの、ステレオタイプなレトロ感覚を演出した空間も散見される。

しかしながら、こうした記号化が進むことに対する懸念は、地域コミュニティの中でもある程度共有されており、それに抗う取り組みも行われている。たとえば、2018年に開館したコミュニティ・ミュージアム(Museum Phuket)の取り組みは、その一例といえる。かつて警察署・裁判所として使用されてきたコロニアル様式の建物をリノベーションしたミュージアムでは、地域住民からプークェット旧市街の暮らしや歴史に関するオーラル・ヒストリーを収集し、それを展示するといった取り組みを行なっている。これらの展示は、創造都市化が進む中で不可視化されがちな高齢住民の記憶を可視化するとともに、若い世代の住民がプークェットの歴史や文化遺産を学ぶ場所としても機能している。このようにプークェットの創造都市化は、「場所の力」の記号

化という表層的な消費に取り込まれていく状況に抗う形で、「場所の力」を生み出す都市 commons の生成という側面もみられるのである。

#### 参考文献

Cohen, E.(2014). Heritage tourism in Thai urban communities. *Tourism, Culture & Communications*, 14,1-15.

Hayden, D. (1995). *The power of place: urban landscapes as public history*. Cambridge, US: MIT Press. [後藤春彦・篠田裕見・佐藤俊郎訳(2002)『場所の力ーパブリック・ヒストリーとしての都市景観』学芸出版社] .

Herzfeld, M. (2017). Playing for/with time: tourism and heritage in Greece and Thailand. In M. Gravari-Barbas & S. Guinand (Eds), *Tourism and gentrification in contemporary metropolises* (pp. 233-252). London, UK: Routledge.

Gotham, K. (2005). Tourism gentrification: the case of New Orleans' Vieux Carré (French Quarter). *Urban Studies*, 42(7), 1099-1121.

Richards, G.(2020). Designing creative places: The role of creative tourism. *Annals of Tourism research*, 85, article 102922.

Rugkhapan, N.T.(2023). Linear tourism, multiculturalism, creative district: The case of Charoenkrung creative district in Thailand. *Annals of Tourism Research*, 102, article 103626.

山本真人(2022). 『commons思考をマッピングする』BMFT 出版部.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 須永和博	4. 巻 8(2)
2. 論文標題 「場所の力」を紡ぐ：タイ国プーケット旧市街におけるセルフ・ジェントリフィケーション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 観光学評論	6. 最初と最後の頁 161-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須永和博	4. 巻 38
2. 論文標題 多層的なローカリティの創出 タイ南部ソクラー旧市街におけるまちづくりの諸相	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 387-391
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Kazuhiro Sunaga
2. 発表標題 'Creative Turn' in Thai Tourism: A Case Study of the Old Town of Phuket
3. 学会等名 14th International Conference on Thai Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 須永和博
2. 発表標題 多層的なローカリティの創出 タイ南部ソクラー旧市街におけるまちづくりの諸相
3. 学会等名 第38回日本観光研究学会全国大会
4. 発表年 2023年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 市野澤 潤平 (編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 194
3. 書名 基本概念から学ぶ観光人類学	

1. 著者名 神田 孝治、森本 泉、山本 理佳 (編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 232
3. 書名 現代観光地理学への誘い	

1. 著者名 須藤 廣、遠藤 英樹、高岡 文章、松本 健太郎 (編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 よくわかる観光コミュニケーション論	

1. 著者名 山口 誠、須永 和博、鈴木 涼太郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 194
3. 書名 観光のレッスン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------